

「移動する子どもたち」は大学で日本語を どのように学んでいるのか

－複数言語環境で成長した留学生・大学生の
日本語ライフストーリーをもとに－

川上 郁雄・尾関 史・太田 裕子

キーワード：複数言語環境、「移動する子ども」、言語能力意識、日本留学、日本語学習、ライフストーリー

【要旨】 本稿は、日本の大学で学ぶ留学生・大学生の中で、幼少期に複数言語環境で成長した経験のある学生の複数言語能力意識についてインタビュー調査をもとに考察し、その結果を踏まえてこれらの学生への日本語教育のあり方を検討したものである。

近年、日本の大学には複数の言語能力を有する学生が増加している。ただし、その中で言語能力の不足から日本語による授業にも英語による授業にも十分に対応できない学生がいることや、それらの学生の中に幼少期に複数言語環境で成長した経験のある学生たちがいることが指摘されてきた。本研究では、これらの学生を「移動する子ども」(川上, 2009) と捉え、彼らの主観的な言語能力意識を理解することから実態を把握することをめざした。そのため、これらの学生が自らの複数言語能力をどのように捉え、言語学習にどのように向かっているのか、またそのことが自己形成にどのような影響を与えているのかを中心に、学生へのインタビュー調査を行った。学生17名に対して行った半構造化インタビューの結果、幼少期からの生い立ちや家庭環境、複数の言語の使用状況、言語学習経験などが、それぞれの学生の言語能力に対する意識の形成に大きく影響を与え、それらが言語学習全般への動機や姿勢、さらには自己形成に深く関わっていることが明らかになった。本稿では、3名の学生の事例に焦点を当て、分析を行った。特に注目したのは学生自身が自らの日本語能力に向き合い、自分の生き方の中に日本語を位置づけていく感覚である。これを本稿では「日本語との距離感」と呼ぶ。この「日本語との距離感」は学生一人ひとりによっても異なるし、日本語学習を通じて微妙に変化していく様子が見られた。この結果を踏まえ、大学で行われる日本語教育の実践について考察し、これらの学生への日本語教育は学生の言語能力意識に働きかける授業が必要であることを提言した。

1. 問題の所在

近年、日本の大学においては留学生を大量に受け入れ、教育をする政策が積極的に進められている。そのため、日本の大学にとって、英語による授業を提供するなど、留学生の学びやすい環境整備をいかに進めるかが大きな課題になっている。一方、高校まで日本国内外で成長し、複数の言語に触れながら成長し、日本の大学に入学してくる学生の数も増加している。

しかし、日本の大学で学ぶ、これらの留学生・大学生の中には、言語能力の不足から日本語による授業にも英語による授業にも十分に対応できない学生がいることも指摘されている(中川・中山, 2005、小澤, 2007など)。さらに、それらの留学生・大学生の中には、幼少期に複数言語環境で成長してきた経験のある「移動する子ども」(川上, 2009) という背景のある学生が多数含

まれていることもわかってきた。

私たちは、2009年4月からこれまで、東京都内にある私立大学に在籍する複数言語環境で育ってきた留学生・大学生17名に対し、それぞれ約1時間程度の半構造化インタビューを行った。その結果、幼少期からの生い立ちや家庭環境、複数の言語の使用状況、言語学習経験などが、個々人の言語能力に対する意識の形成に大きく影響を与え、さらにそれらが自己形成や言語学習全般への動機や姿勢に深く関わっていることが明らかになった。

では、「移動する子ども」として成長したこれらの学生は、日本の大学に入り、日本語や英語を使う授業に参加し、かつ日本語教育を含む言語学習環境の中で、自らの複数言語能力や言語学習そのものに対して、どのような考えや意識を持つようになったのか。さらに、その結果、日本の大学における日本語教育の実践をどのように捉えているのか。

私たちは、2009年に「移動する子ども」として成長した学生たちにインタビュー調査を行った（以下、一次調査。詳しくは尾関・川上、2010参照）。その学生たちに継続調査を行い、上記の問題について、再度インタビューを実施した（以下、二次調査）。本発表では、この二次調査について、調査の概要、結果の分析、考察の順で論を進める。最後に、これらの学生も含め、今後の日本語教育のあり方についても考えたい。なぜなら、ますます「移動する子ども」が増加する時代にあって、多様な言語環境で成長した学生を大学はどう受け入れ、どのような言語教育を行っていけばよいのかという課題は、学生を受け入れる側の日本の大学にとっても、学生を送り出す側の日本国外の大学にとっても非常に重要な課題と考えられるからである。

2. 調査概要

二次調査は、一次調査でインタビューを行った留学生・大学生17名のうち、4名の学生を対象に再度インタビューを行った。この4名を選んだ理由は、幼少期より日本語を含む複数言語環境にあり、日本語を学習した経験があること、さらに来日してから大学で日本語クラスを受講している学生という理由である。この4名に対し、それぞれ1時間程度の半構造化インタビューを行った。なお、前回のインタビューでは、主に日本語を使用したのが、今回のインタビューでは、学生たちが自由に操ることのできる言語である「英語」を主に使用した。英語を使用することにより、より詳細かつ深い語りが得られるのではないかと考えたためである。ただし、実際のインタビューでは、日本語・英語の双方の使用を認め、その都度、話しやすい言語で話してもらうように伝えた。インタビューでは、来日前および来日後の日本語学習に関することを中心に語ってもらった。

二次調査の主な質問内容は、次のようなものである。

1) 来日前の日本語学習について

- ・どのようにして日本語を学んできたか
- ・日本の大学での日本語学習についてどのような予想（期待）をしていたか

2) 来日後の日本語学習について

- ・どのようなクラスを受講したか
- ・クラスのレベルは自分の日本語能力にあっていたか
- ・クラスに参加するときの態度は、日本に来る前の態度と異なるか
- ・日本語クラスに出て、自分の日本語能力は変化したか
- ・日本語のクラスや日本での生活を通して、自分の日本語能力についてどのような意識が出てきたか

これらの質問内容を中心に半構造化インタビューを実施した。紙面の都合から、インタビューを実施した4名のうち3名(サヤカ、ハンナ、ソフィア、いずれも仮名の女性)の語りを中心に報告する。なお、本文中に引用されている語りは英語で行われたインタビューを日本語に翻訳し、示したものである。

3. 事例研究

ケースa. サヤカさん(学部生)の場合

1) プロフィール

日本人の両親のもと日本で生まれたサヤカさんは、3歳のときに父親の転勤に伴って家族でアメリカに移住した。アメリカでは、家庭内言語は日本語だったが、弟とは英語で話した。高校卒業までアメリカの現地校に通う傍ら、補習授業校や「塾」に通うことで、日本語を学んだ。しかし、アメリカでは日本語学習に対してあまり真剣ではなかったという。その理由は、アメリカでの大学進学を希望していたこと、補習校や塾の学習環境をあまり好きになれなかったことである。その結果、補習校では教科書を読んで理解することや漢字が苦手で、日本の大学に進学しても日本語による読み書きができないという意識があった。

2) 日本語の授業に関する思い

サヤカさんは日本の大学に入学し、まず、週2日の日本語クラス(中上級レベル)を受講する。このクラスの雰囲気について、サヤカさんは、「とてもよい学習環境だった」と満足していた。サヤカさんにとっての「よい学習環境」が何を意味するのかは、次の語りに表れている。

私たちはみんな友達で家族のようでした。多分、毎週二日顔を合わせていたからだと思います。それに、(中略)私たちはみんなやる気があったからです。クラスには私ともう一人、帰国生がいて、私たち二人はクラスの中で一番日本語がうまく話せました。クラスメイト達によると、私たちがクラス全体のレベルを引き上げていて、みんなも私たちのように話したり私たちの話していることを理解したりしたいと思っていたそうです。先生にも、私たち二人がとても努力しているのがわかるから、他の人たちががんばろうとしているんだと言われました。私もベストを尽くしたいし、他のみんなもベストを尽くしたい。クラス全体が努力していて、みんなが友達という、学ぶためにはとてもよい雰囲気でした。だから、最初の一年で私の日本語レベルは本当に向上したんです。

この語りから、サヤカさんが言う「よい学習環境」には、二つの要素が含まれることが分かる。一つ目は、週2日というように、頻繁に授業が行われ全員が顔を合わせる環境である。二つ目は、自分もクラスメイトも全員が努力し高め合う環境である。特に二つ目に関して、日本人であり日本語で話す能力が他のクラスメイトよりも高いサヤカさんともう一人の学生が、他の学生たちのレベルと意欲を引き上げ、互いにより影響を与え合っていたことが分かる。そのような関係の中で、クラス全員がまるで「家族」のような親しい関係になったのである。

興味深いのは、このようなクラスの雰囲気と自身の日本語レベルとをサヤカさんが結び付けて語っている点である。全員が友人のような「学ぶためにはとてもよい雰囲気」において、サヤカさんは「私の日本語レベルは本当に向上した」と感じているのである。

次の学期に、サヤカさんは上級レベルの作文、漢字を選択した。では、それらのクラスをサヤカさんはどう見ているのか。まず、彼女は作文の授業に必ずしも満足していなかった。サヤカさんは、作文の授業で求められているよりも頻繁に文章を書きたいと考えていた。また、自由にトピックを選んで書くという最終課題に対しては、むしろ教員に指定された「難しいトピック (a hard topic)」について文章を書きたいと考えていた。つまり、自分の知っていることを自由に書くより、教員が与える「トピック」について、調査し、理解を深め、書くという課題に挑戦したいと考えていた。このことから、サヤカさんが作文の授業において、単なる日本語の書き方という表面的な技能の習得を求めているのではなく、新たな知識を得、自分にはなじみのない話題についても文章を書く機会を与えられることを望んでいることが分かる。

漢字の授業についてはどうだろうか。サヤカさんは契約書の内容を理解するなど、日本で社会的な生活を送る上で、漢字を理解することは不可欠な要素であると意味づけている。それだけに、漢字に対して「恐怖」と言うほど強い苦手意識を持っていた。上級レベルの漢字クラスでは、毎週80の新出漢字と、それを含む熟語を三、四個ずつ学習する。この学習量をサヤカさんは「本当に大変」で漢字の学習のために「週末がすべてつぶれる」ほどだったと言う。しかし、それは価値があるとサヤカさんは考えている。なぜなら、「ニュースを聞いていると、漢字でどう書くかわかる」というように、「本当に役に立っている」と実感しているからである。

このように、サヤカさんは学習者主体の自由な活動よりも、教師から与えられる難しい課題に挑戦するような学びのスタイルを求めているのである。では、サヤカさんは自らの日本語能力についてどのような意識が生まれたのか。

3) 日本語能力意識の変化

サヤカさんは、一次調査の際、日本語では自分を十分に表現できないと語っていた。日本語ではとても「形式的 (formal)」になり、日本語でどのように冗談を言ったらよいのか分からないと言うのである。そのため、日本語で話す相手と英語で話す相手では、見せている自分の内面が異なっていた。しかし、二次調査では自分の日本語能力について、次のように語っている。「でも、今は (英語と日本語が) 同じくらいになったと感じています。日本語でも自分自身を表現できるようになったんです。それは大きな変化ですね」。

自分を表現するための日本語能力が向上した理由を、サヤカさんは、日本語でしか話さない日

本人の友人が増えたからだと考えている。サヤカさんは二つのサークルに所属し、ボランティア活動にも従事しており、そこでは日本語だけを使用しているのである。また、日本人の友人と親しくなったことで、日本で進学した当初とは違い、日本語でわからないことがあれば友人に質問できるようになったという。

日本で日本語を学習することによって、達成したい日本語レベルに関する目標にも変化が出てきた。日本の大学に進学する前、サヤカさんは、辞書を使わずに日本語の新聞を読んだり文章を書いたりできるようになるという目標を立てていたが、実際に日本で生活し、日本語を学習する中で、サヤカさんはこの目標が難しい目標であることに気付いたという。そして、次のように語る。

もちろん、以前に比べて記事の内容をずっとよく理解できるようになりました。でも、全ての漢字が理解できるわけではありませんし、おそらく今後も長い期間にわたって、辞書に頼らなければならないと思います。しかし、私はそれを受け入れるようになりました。自分は文脈を理解し、大まかな内容をつかむことができるし、時にはそれで十分なのだという事実を、受け入れるようになったのです。

さらに、日本において周囲にどのように見られたいかという点に関しても、サヤカさんの意識は変化している。日本に来た当初は、周囲の人々に、「外国の学生」として見てほしいと考えていたという。つまり、もし日本語でわからないことがあっても、15年間海外にいたからだということを理解してほしいと考えていたのである。しかし現在は、「普通の日本人」として扱ってほしいと考えるようになったのだという。その理由は、日本人の友人が増えたためだとサヤカさんは考えている。友人たちのように話し、友人たちのようにEメールやエッセイを書きたいと思うようになったと語る。

4) 日本語能力意識の変化によってもたらされた変化

日本語のクラスの内外で日本語能力を向上させ、日本語でも自分を表現できるようになったことによって、サヤカさんは様々な変化を経験している。その一つは母親との関係の変化である。サヤカさんは、母親とは日本語でのみ会話をしてきたが、日本語では十分に自分を表現できなかったために、お互いに十分理解し合うことができなかつたと感じていた。しかし、日本語で自分を表現できるようになると、母親に対しても、「私のもっと面白い側面」を表現できるようになり、お互いをよりよく理解できるようになったという。もう一つは、将来の進路に関する意識である。以前は、アメリカの大学院に進学し、アメリカで働くことを希望していた。しかし現在は、日本で働く可能性も検討しているという。現在サヤカさんが抱えている夢は、日本で自分の保育園を設立することだという。この夢を持ったのは、日本の大学で教育関係の授業を履修したことがきっかけであった。子どもたちや教育に対する教授陣の熱意に刺激を受け、自分も是非教育に関わりたいと考えるようになったのだと語る。

ケースb. ハンナさん（交換留学生）の場合

1) プロフィール

ハンナさんは、デンマーク人の父と日本人の母のもとに、デンマークで生まれ育った。デンマークでは、家庭・学校を含め、ほぼデンマーク語での生活を送っていたが、2年に1度ぐらいの割合で日本にいる母親の両親のもとを訪れる機会があったという。また、祖父母のもとで半年ほど生活しながら日本語を学んだ経験もあり、高校卒業後はデンマークの大学に進学し、日本語を専攻した。その後、2009年秋、交換留学生として日本の大学にやってきた。

2) 日本語の授業に関する思い

ハンナさんは、日本の大学で受けている中級前半の日本語のクラスについて、次のように語っている。

正直に言うと、今、取っている日本語のコースはちょっと退屈だと思います。それぞれのレベルでどんなことをするのか、またそれぞれの授業で何をすることが全てスケジュールとして組まれていて、7月のクラスが終わる時まで、私たちがどんなことを勉強するかが事前に全てわかってしまうんです。

このような語りから、ハンナさんは教科書を使ってスケジュール通りに日本語を学んでいくという授業のあり方にあまり満足していないことがうかがえる。そして、このような考え方の背景には、これまで自分が受けてきたヨーロッパの教育の影響があるという。

日本では、これを勉強して、テストのためにこれを覚えてという勉強が中心で、あなた自身はどんなふうにかえるかということは、あまり重視されていないような印象があります。でも、ヨーロッパでは、何かをテストで測るということは決してしないんです。だから、教育観がそもそも違うんだと思います。

これまで自分が受けてきたデンマークの語学教育と比較する中で、日本語クラスを捉えていることがわかる。一方、ハンナさんがこのような思いを持つようになった背景には、日本語の授業以外の場での経験も大きく影響しているようであった。

3) 日本語の授業以外での経験

ハンナさんは、日本語クラスでの学習経験のほかに、日本でジャーナリズムの仕事の手伝いをした経験を持っていた。その経験を通して、実際の場面での日本語使用経験が増えたこと、また、自身の日本語能力や日本語を使用する際の意識が大きく変化したことを次のように語っている。

日本に来てから、本当にたくさんのことを体験しました。それは、日本でもジャーナリズムの仕事をしたことが大きいと思います。日本人の人に何度もインタビューをしたんです。し

なければならなかったという切迫感が、よかったんだと思います。(デンマークで放送できるように) デンマーク語の字幕をつけなければならなかったのです。こういったことは、日本に来る前は、全然やったことがなかったんです。だから、自分の日本語を実際の仕事の場面で使ったのはこれが初めての経験だったと思います。(中略) この経験を通して、本当にいろんなことを学びました。まず、できるだけ敬語を使わなくてはならなかったし。Eメールもたくさん書かなくてはならなかったし。でも、一番大切なことは、私が言いたいことを失礼が無いように相手に伝えるということでした。

ジャーナリズムの仕事を手伝う中で、相手に失礼にならないようにと常に気遣いながら日本語を使った経験が、彼女にとって大きな学びの経験として捉えられていることがわかる。また、このような経験を通して、ハンナさんは、コミュニケーションの取り方が変化してきたこと、そして、日本人の行動の背後にある思想を深く探りたいという気持ちが出てきたと語る。

変わったこととしては、他の人が言ったことが難しかったり、相手が難しいことばを使ったりしたとしても、それを恐れなくなったことだと思います。もし、自分が本当にしたいと思うことだったら、きっと最後にはわかるはずだと思えるようになったり、別の方法で説明してくれるようお願いできるようになりました。以前は、理解できないだろうと思ったら、ギブアップしていました。でも今は、もし正しい言葉が使えなかったとしても、別の方法でもう一度言ってみれば、理解してもらえるかもしれないと、チャレンジしてみようと思えるようになりました。そうすると、彼らも、「あー、あー、こういうことですね。はいはい」といってくれるようになりました。とてもいいことだと思っています。もっと挑戦したいという気持ちが出てきたのだと思います。

また、「何かに挑戦したい」という気持ちについて、ハンナさんは二つの言語と文化を持つ自分の背景と合わせて次のように言う。

私は二つの異なる文化の間で育ちました。だから、私にとって、文化の背景にあることについて探求するのはとても興味がありますし、それが、現在の自分の母親を理解することにもつながると思っています。

さらに、物事の背景にある考え方に関心を持つようになったことで、ハンナさんは敬語などに代表される、日本語における言葉の使い分けとその背景にある日本人の考え方とが深く関連していることに関心を持つようになったと語る。

日本語では、敬語の使い分けなど、多くの言語の切り替えがありますが、それは考え方も深く関係していると思います。そして、日本についてよく知ることで、また、日本人と話すことで、その使い分けをよりよく理解することができると思っています。わたしも

ジャーナリズムの仕事を通して、さまざまな日本人と話す機会が多くありましたが、人々の考え方を聞くのはとても面白いことでした。そして、それが自分の母親を理解することにもつながり、とても興味深く思っています。

「二つの異なる文化の間で育ち、日本語における言葉の使い分けとその背景にある考え方に興味を持つことで、それが自分の母親の理解へとつながる」という点は興味深い点である。

ケースc. ソフィアさん（学部生）の場合

1) プロフィール

ソフィアさんは、アメリカ人の父と日本人の母のもとに日本で生まれた。日本の幼稚園に通い、当時は友達との会話も全て日本語を使用していたという。しかし、その後、5歳の時にアメリカに渡ると、家庭内でも学校でも完全に英語のみの生活に切り替わった。そのため、現地の中学に入るところには、日本語はすっかり忘れ、たまに親戚と話すときに日本語を使う程度であったという。その後、再び日本に興味を持つようになり、2009年秋、日本の大学に入学することにした。なお、学校での日本語学習経験はこれが初めての経験となる。

2) 日本語の授業に関する思い

入学当初、初中級レベルの日本語クラスに入ったソフィアさんだったが、漢字を全く勉強したことがなかったため、大変苦労したと語る。

漢字は一度も勉強したことがなかったので、全然わかりませんでした。だから、初めは初中級のレベルに入って、本当に大変でした。なぜなら、そのレベルではすでに初級の漢字を学習していることが期待されていたから。だから、本当に大変でした。

ソフィアさんにとって、漢字の学習が大きな壁として捉えられていることがわかる。漢字ができないことは、その後の語りの中でも繰り返し言及され、自分自身の日本語の能力を必要以上に低く評価しているように見えるほどであった。このような漢字への苦手意識から、彼女は日本語のクラスでの学習に懸命に取り組んでいた。一方で、彼女は日本での学びの経験を通して、日本語以外の面でも多くのことを学んでいた。

3) 日本語を使う学習や生活から呼び起こされた自分の中にある「日本」

日本語を学ぶという目的のために来日し、苦手な漢字を克服するために一生懸命勉強していたソフィアさんであったが、「日本語」以外にも彼女が得たものは多かった。彼女は、日本に来てからの自分自身の変化について、次のように語っている。

大学に来る前は、私は、単に4年間の日本での経験をして、アメリカに戻るとのことだけを考えていました。でも今は、ここ（日本）に暮らすのも悪くないなと考えるようになって

ています。【何がきっかけでそのように変わったのですか?】多分、アメリカに住んでいるときは、洗脳とは言いたくないんだけど、でも、よくわからないけど、私の考え方は、アメリカは何事においても一番というものでした。日本に来てからは、いろんな国の友達と話をするようになって、今までの考え方とは少し変わってきて、アメリカが一番だとは思わなくなりました。

これまで、アメリカで英語に囲まれて育ってきた中で、「アメリカこそが一番」と思ってきた信念が、さまざまな背景を持った友人と出会うことで、少しずつ揺らぎ始めていることがうかがえる。さらに、このような揺らぎは、ソフィアさんのアイデンティティの揺らぎにも見られた。幼少時に日本に暮らしていたときには、周囲は日本人ばかりの環境で、自分が日本人であることを疑わなかったという彼女だが、渡米し、英語に囲まれた環境になったことで、自分はアメリカ人だと思うようになったのだという。しかし、彼女のアイデンティティは、日本に来ることで再び揺さぶられ始める。日本でアルバイトをしているとき、周囲の人々が自分を見るまなざしから、彼女は自分のアイデンティティが揺らぐ経験をする。

多分、職場のマネージャーたちはみんな、知らない人もいるのだと思うけど、私の発音はそれほど悪くないので、多分、みんな私が日本語をよく知っていると思っていて、だから、私が適切に受け答えできなかったときに、戸惑ったんだと思います。他の多くのバイトの学生たちはみんなバイリンガルなので、これはそれほど大きな問題にはならないけど、でも、もしみんなが私の背景を知らなくて、私は日本語だけを話すのだと思っていたら、さっきみたいなことになるんだと思います。特に学校みたいなところだと、(もし私が間違ったりしたら)みんなは私を失礼だと思うかもしれません。(中略) 多くの人は、私は100%日本人だと言うし、ある人は、私は完全なアメリカ人だと言うし、私も本当は良くわからないんです。(中略) 日本で育ったときは、とても幼くて、私はいつも自分は日本人だと思っていました。でも、アメリカに移ってからは、全く異なる扱いを受けて、とても混乱しました。でも、徐々にアメリカでの生活にも慣れて、私はアメリカ人になったんです。私は、アメリカ人のアイデンティティを持っていると感じていました。友達もみんなアメリカ人だったし。それから、大学に入るために日本に来たら、また、とても混乱しています。つまり、多くの人は、私はアメリカ人だというだろうけど、でも、私自身は、二重国籍を持っていると感じています。

日本、アメリカ、そして再び日本という移動を繰り返す中で、彼女が自分のアイデンティティの在り処をめぐって揺れている様子が見て取れる。そして、それは周囲からどのような見方をされるのかということと深く結びついている。当初は、日本語を勉強するためにという気持ちでやって来た日本での生活を通して、考え方やアイデンティティが大きく揺さぶられることになろうとは、彼女自身も予想できなかった。「驚いている」、「混乱している」という語りが何度も繰り返される様子からも、それがうかがえる。

4. 「移動する子ども」だった学生の語りから日本語教育を考える

最後に、3名の語りから、私たちがこれらの学生たちをどのように捉え、彼らの日本語教育をどのように構想するのかについて考えてみたい。

まず、彼らの幼少期からの成長過程に見られる特徴を見てみよう。

第一は、彼らは日本に来る前から、幼少期より家庭や学校等で日本語に触れながら成長してきたということである。第二は、だからといって、その日本語能力にゆるぎない自信があるわけではないという点である。日本語の読み書きの力や漢字を不得意とする語りがあった。第三は、そのような気持ちが幼少期からの日本語学習や自分自身の捉え方にも影響していたという点である。

これらの特徴を背景に、日本に留学し日本の大学で日本語を学ぶことによって、彼らの中にさまざまな変化が生まれてきているように見える。たとえば、サヤカさんは日本に留学し、実際に日本の大学で学ぶようになると、まず自分が日本語のクラスでどのような位置にあり、どのようにふるまうのがよいか戸惑いや葛藤が生まれたという。自分の日本語能力の弱点を意識していたため、自分が「海外にいる日本人」と認めてほしかったという。自分が日本にいる学生とは違うように見てほしいという願望である。ソフィアさんの場合、「アメリカ人」「日本人」と戸惑いがあり、改めて自分の中の日本的な部分に向き合うようになっていく。

大学で履修する日本語クラスの進め方や日本語学習の目的、到達目標についても変化が生まれてくる。たとえば、サヤカさんの場合、日本語クラスという「社会」で日本語を学習し、難しい課題やクラスでのやりとりに参加していく中で、来日前の漠然とした日本語能力の到達目標が自分にとっての意味のある明確な目標に変化していく。そのような変化は、将来の自分の進路や仕事、生き方と自分の持つ複数言語、特に日本語と合わせて考えるような姿勢に影響していく。たとえば、ソフィアさんの場合は、漢字力が弱いという自己評価があり、そのことが自らの日本語能力全体の自己評価にも影響を与えているが、日本語学習に積極的に取り組むことによって、そして日本語を使って日本で生活することによって、幼少期に日本で暮らしたことや自分のルーツ、そして自分の中にある日本的な部分を再評価していく。また、自分が考える日本語能力や日本的な部分というのは、日本語クラスだけで育成されたり気づかされたりするのではなく、日本語を使う場面や目的は、当然ながら、日本語クラス外にもあり、そこでも彼らの学びは起こっている。

そのことも踏まえて、これらの学生にとっての日本語教育のあり方を考えると、彼らが日本で日本語を学ぶということは、彼らが幼少期より日本語とどのような関係にあったのかということと密接に関連している。ここではそれを「日本語との距離感」と呼ぼう。つまり、幼少期より家庭内で日本語を使用したり、日本語を学んだりするが、日本語以外の言語の使用によって自分自身と日本語との間に距離が生まれる。ところが、その距離が日本に来て大学で日本語を学ぶことによって、新たな日本語を発見し、自らの中にある日本語や日本的なものを新しく捉え直すことになる。そうになると、来日前の「日本語との距離感」が来日後に変化していくことになる。サヤカさんがアメリカの大学を出てアメリカで活躍することから日本で日本語を使って仕事をするように、またソフィアさんが当初は日本の大学を出たらすぐにアメリカへ帰る予定

だったことを再考したように、自分の自己形成や自己実現、つまりは自分の生き方との関連で考えるようになるのは、「日本語との距離感」が変化したことと密接に関連するのではないか。

「日本語との距離感」が変化するというのは、日本語を学習し日本語能力が向上したためとも言えるだろうが、それだけではない。日本に来て、生きた文脈の中で日本語を使った他者とのやりとりから「日本語との距離感」が変化したと考えるべきであろう。たとえば、ハンナさんがジャーナリズムの仕事を通じて日本語の学びがあったと語ったことは、その例であろう。また、自分自身のアイデンティティに向き合うことによっても、「日本語との距離感」は変化するであろう。ハンナさんが「二つの言語と文化」を持つ自らの背景と合わせて語るのがその例である。さらに、そのような「日本語との距離感」が、サヤカさんやハンナさんが語るように、母親との相互理解や距離にも影響していく。

このように幼少期より複数言語環境で成長する学生たちは、それぞれの半生の中でそれぞれの「日本語との距離感」を持って日本の大学に入学してくる。その「日本語との距離感」の中には自らの日本語能力についての不安感も含まれる。そのような日本語能力についての意識が、日本語学習を通じて新しい「日本語との距離感」を生み、積極的な生き方へ変化することもある。幼少期より複数言語環境で成長する学生たちは、その成長の時間軸にそって自らが納得する「日本語とのつきあい方」を見つける作業を、日本語学習を通じて行っているのである。

ここでの「日本語との距離感」という議論は、学習者の心的領域に関わるという意味で、外部からは見えにくいものである。ただし、そのような外部から見えにくい心的領域に関することは、これまでも日本語教育においてはさまざまに議論されてきている。たとえば、待遇表現を使用するコミュニケーション場面では学習者が相手との親疎の「距離」を推し量って日本語を使用するという議論がある。これは学習者の心的領域に見られる判断に関する議論である。あるいは、心理や認知という視点から言語学習を捉える研究では、学習者の思いや考えが日本語を学ぶ際の心理的な負担感やストラテジー使用にどう影響するのかという議論がある。これらの研究はいずれも、日本語学習者の「ことばの学び」や「ことばの使用」についての思いや考えが、学習者の日本語使用、日本語学習にどのように影響したり、あるいは学習動機をどのように形成するのかという問題意識で研究が進められてきたと言えよう。

しかし、本稿での議論の「日本語との距離感」「日本語とのつきあい方」という論点は、先行研究の問題意識と必ずしも同じではない。というのは、「日本語との距離」「日本語とのつきあい方」という論点は、学習者が自己を形成する中で自分の中にどのように日本語を位置づけ、それとどのように向き合い、今、そしてこれからの人生にどのように日本語を生かしていくのかという課題であり、同時に、それに向かうときに学習者一人ひとりが生きていく上で不可欠な課題となるという意味において、学習者それぞれの生き方に直結する視点を提供することになるからである。この点は先行研究の論点と大きく異なる。つまり、先行研究では学習者の「ことばの学び」や「ことばの使用」についての思いや考えが、学習者の日本語表現の使用や日本語学習成果と学習動機の関係という、いわば今の言語使用や言語学習状況を説明するために考察された面が強いが、本稿が指摘する「日本語との距離感」「日本語とのつきあい方」という論点は、学習者がこれまで生きてきた人生において、またこれからの人生において、日本語とどう向き合うかという

生き方と切り結んだ論点を提供しており、その意味で先行研究の論点とは大きく異なるのだ。

そのように考えると、日本語に関する言語知識と、日本語によるコミュニケーション機会を学習者に提供すればよいという日本語教育では十分とは言えないのではないかという疑問が生まれてくる。つまり、これからの日本語教育は、学習者が日本語を単に使えるようになる教育から、学習者にとって日本語を使うことが自らの生き方にどのようにつながるかを意識する言語教育をめざす必要があるのではないだろうか。

たとえば、漢字を学びながら漢字を使うときの自らの意識を考える実践、今までの自らの成長を振り返り自分史を語る実践、あるいは日本語を学ぶことは自分にとってどのような意味があるのかを考え、語る実践など、つまり日本語を使って生きてきたときの意識や自らの日本語能力についての意識に働きかけるような実践である。これらの実践では、これまでの日本語教育の実践から学習者個人が自らの日本語能力と向き合い、これからの人生に日本語をどのように生かしていくのかを学習者間で交流するような機会をコース内に設けるような工夫も可能であろう。

これまでの日本語教育の実践は、スキルやコミュニケーション能力を学習者に育成することに重点を置き、その後の人生で日本語をどのように使用するかは学習者に委ねる傾向があったと思われる。しかし、これからの日本語教育実践は、日本語を学習することと学習者が生きることがどのように学習者自らの中に位置づけられるのかを学習者自身が考えながら、日本語を使う生活と自らの生き方を切り結ぶような実践が求められるのではないだろうか。私たちは、まだそのことに気付き始めたばかりであるが、この課題へ向けて今後さらに実践を重ねていきたいと考える。

参考文献

- 小澤伊久美 (2007) 「学部初年次教育としての日本語教育に求められるもの－帰国生に対する教育実践から－」 小川貴士編『日本語教育のフロンティア－学習者主体と協働－』くろしお出版、pp.137-160.
- 尾関史・川上郁雄 (2010) 「『移動する子ども』として成長した大学生の複数言語能力に関する語り－自らの言語能力をどう意識し、自己形成するのか－」 細川英雄・西山教行編『複言語・複文化主義とは何か－ヨーロッパの理念・状況から日本における受容・文脈化へ－』くろしお出版、pp.80-92.
- 川上郁雄 (2009) 「Children Crossing Borders : CCBを考える－子どもにとって日本語は母語か第二言語か継承語か－」 JSAA-ICJLE2009 (2009年度豪州日本研究学会・日本語教育国際大会) ニューサウスウェールズ大学・シドニー大学, (2009年7月14日)
- 川上郁雄編 (2010) 『私も『移動する子ども』だった－異なる言語の間で育った子どもたちのライフストーリー－』くろしお出版
- 中川千恵子・中山由佳 (2005) 「ある接触場面における一考察－インターナショナルスクール出身の日本語母語話者クラス報告－」『早稲田大学日本語教育センター紀要』19, pp.99-130
- 山口悠希子 (2007) 「ドイツで育った日本人青年たちの日本語学習経験－海外に暮らしながら日本語を学ぶ意味－」『阪大日本語研究』19, pp.129-159

Yoshimitsu, K. (2008) Japanese Language Socialisation of Second-generation Japanese in the Australian Academic Context. *Electronic Journal of Foreign Language Teaching*. Vol.5, Suppl.1. pp.156-169. Centre for Language Studies National University of Singapore.

【付記】本研究は、2009年度早稲田大学教育総合研究所公募研究助成費による研究成果の一部である（研究代表：川上郁雄，尾関史，太田裕子）。

